

ボグド・ハーン政権軍南進作戦に関する一考察

—阿爾花(アルファ)公・ナスンアリビジフの帰還問題を中心に—

小軍¹

要旨

1913年1月末、外モンゴルで成立したボグド・ハーン政権はモンゴル軍を五路の部隊に分け、内モンゴル中部に位置するシリーンゴル盟、中西部に位置するウラーンチャブ盟の地域に進軍させた。その中で、第三路軍の指揮官を勤めたのは内モンゴルのホルチン左翼後旗出身の阿爾花公・ナスンアリビジフである。彼の率いる部隊は内モンゴルのスニド左・右旗およびドゥルブド王旗方面であり、一時期はドロンノール付近まで前進したが、同年九月において、当時中華民国政府に顧問として勤めていたスウェーデン人宣教師F・A・ラルソンの斡旋の元で中国側に投降した。

キーワード：ボグド・ハーン政権 阿爾花公 F・A・ラルソン 丑年之乱

I. はじめに

1913年1月末、外モンゴルで成立したボグド・ハーン政権はモンゴル軍を五つの部隊に分け、内モンゴル中部に位置するシリーンゴル盟、中西部に位置するウラーンチャブ盟の地域に進軍させ、両地域での軍事作戦が同年末まで続いた。当時、地元の人々にとって戦乱が起こったこの年は悲慘的な一年でもあったため、現地の人々は通常この事件を「ウヘル・ジリン・ウイメーン」（丑年之乱）と称している。

従来、この軍事作戦の目的に関しては「内モンゴルを解放する行動」²、「実効支配地域の拡大」³或いは「限定された地域での‘防衛’と‘迎撃’にとどまる」⁴など様々な見方が出されているが、現地における具体的作戦状況に関する研究は少ない。また、これら限られた先行研究においても、事実関係の叙述が極

めて混乱している。その原因は、少なからず残っている両軍の作戦状況に関する各国の新聞報道や調査資料に、大きなズレがあるからであろう。よって、この南進作戦状況の事実関係を明らかにするための課題は、資料の欠如というより、むしろ当時各側の報道や調査資料をどのように比較した上で把握すべきかにあると思われる。

そこで、本稿はこのボグド・ハーン政権軍南進作戦において一指揮官を勤めた内モンゴルのホルチン左翼後旗出身の阿爾花公・ナスンアリビジフの行動に着目し、ボグド・ハーン政権軍南進作戦における状況や、当時のモンゴル独立運動に身を投じた内モンゴル人出身者の無念な結末に関する考察を通して、この南進作戦においてモンゴル軍ではならぬ側面を明らかにすることを目的とする。尚、本稿における人名・地名の表記は史料の引用箇所の記事を尊重することによるものであるが、引用箇所ではないその他の箇所に関する表記

は、現代ハルハ語に基づきものである。また、曆を全て陽曆に改めた上で表記する。

1. 「頑固党」と呼ばれていた阿爾花公・ナスンアリビジフ⁵

阿爾花公ナスンアリビジフ（1882～1918）とは、内モンゴルのジュルム盟ホルチン左翼後旗の閑散輔国公のことである。阿爾花公と称するのは、彼が当旗の阿爾花⁶という村落に常住していたことから由来した。彼は、第二次アヘン戦争の際に英仏連合軍と戦い、また捻軍の鎮圧にも参加した、著名なボドリゲタイ親王スンゲーリンチンの後裔であり、当該旗においては「頑固党ノ名アルモ旗外ニ於テハ其勇名ニ服スルモノアルカ如ク」⁷、早くから外モンゴルの独立運動に賛同した人物である。

モンゴル国国立中央アルヒーブには阿爾花公ナスンアリビジフが書いたボグド・ハーン政権への帰順の意思を表明した書簡が保存されている。⁸その書簡には次のような内容が記されている。

「小生は、数年前から漢人のモンゴル人に対する威圧や黄教への損害行為は最終的にわがモンゴル人に危害を及ぼすことになると察知し…〔中略〕…〔光緒〕三十二年（1907年）にハルビンに行き、我が内モンゴルのハイサン公、アモゴロン梅倫及びロシア人ギトロト等と会い、黄教やモンゴルの各部を永遠に揺るぎのないものにするため尽力することを相談した。」

そのハルビンに赴いた1907年という時期から推測すれば、阿爾花公ナスンアリビジフがおそらく清朝政権の対内モンゴルにおける新政策実施に不満を持ち、危機感を覚えた上での行動であろうと考えられる。同じ年に、上述のハイサン公はハルビンからロシア經由

で外モンゴル入りし、モンゴル独立の必要性を盛んに呼びかけ始めたといわれている。⁹

一方、1912年3月北京における「曹錕兵変」をきっかけに、内モンゴルの貴族たちによるボグド・ハーン政権への合流の意志表明が本格的に始まる。そこで、阿爾花公ナスンアリビジフ自らがイフ・フレーに駆けつけ、ボグド・ハーン政権の内務部に上述した帰順表明書を奉呈した。しかも、その書簡の書かれた日付が1912年3月17日であることからみれば、彼はおそらく内モンゴルの貴族の中で最も早い段階で合流の意志を表明したことになる。

阿爾花公がイフ・フレーに向けて出発したという情報を日本の在四平街陸軍歩兵大佐の守田利遠が察知しており、1912年4月16日付け奉天総領事落合謙太郎宛の報告には、「博王旗下ノアリホア公ハ四月二日庫倫ニ向テ出発セリ情况ヲ視察シ兼テ内外蒙古ノ連絡ヲ謀ルニアリ」¹⁰と、彼のイフ・フレーへ赴いた時期が1912年4月2日であったことが判明される。

ジェブツンダムバ・ホトクトは阿爾花公の勇氣とボグド・ハーン政権への忠誠を称え、彼にビシルレト貝子の爵位を与えた。阿爾花公はイフ・フレーに約一ヶ月間あまり滞在し、一度領地に戻るが、帰郷直前の1912年5月9日に彼が外務部の次官スウスタイと連名でボグド・ハーン政権内務部に上奏した文章には、「清朝から独立を果たした今こそ一致団結して、ボグド・ハーンに忠誠であることを誓い、政権を固めることに尽力すべし」¹¹と、モンゴル各階級の人々に対して自らの意志表明とも受け止められる熱烈な感情が込められている。その後、彼は「民国元年五月ニ入りタヒ其領地ニ帰来シ内蒙古独立ヲ主唱シ募兵ニ着手シタル」。¹²

しかし、彼が帰郷した1912年5月中旬ごろには、袁世凱による内モンゴル王公への懐

柔政策が効果を上げており、内モンゴル東部地域では「五月末日北京ヨリ帰来セル富勒渾ノ談ハ従来彼レノ洩セシ口吻ト全然別人ノ如ク豹変セリ」¹³のような記載の如き、ホルチン左翼後旗内にも中華民国にとどまる声が主流となっていた。

帰旗後の阿爾花公の行動に関しては、奉天総領事の落合謙太郎が派遣した小川庄藏が博王府台吉・富升阿から「當旗阿花公ハ庫倫ヨリ一度帰旗シ印君等ト爭議シ遂ニ本旗ニ居住スルコトヲ屑トセズ家族ヲ伴ヒ庫倫ニ赴クト称シテ洮南事变当時出発セリ其後或ハ呼倫貝爾ニ至レリト或ハ庫倫途上ニ在リト言ヒ其所在ヲ明ニセズ留守宅ニハ二三ノ奴オアルノミナリ」¹⁴との情報を得ている。小川はまた昌図にいる王尚忠との談話において、「同公ハ當王府會議ニテ旗内ノ官民一般ハ彼ノ行動ヲ認メス（責任トシテノ意ナラン）」¹⁵という話を聞き取っている。さらに、四平街駐在宮内少佐の報告では1912年8月に挙げた科爾沁右翼前旗烏泰王叛乱に関連して、「烏泰反乱ノコトアルニ及ヒ遂ニ家族及部兵ヲ率ヒテ北方ニ赴キタル」¹⁶とされ、阿爾花公の北上時期は同年8月20日頃であった、ということが判明されよう。

その後、阿爾花公はジョーオド盟・ジャロード左旗協理・ゴンブジャブ、トゥメンウリジ等を扇動し挙兵させ、東部内モンゴル地区の中心地である開魯県を攻めた。彼らの部隊にバブージャブの騎兵隊百五十人、洮南事变のモンゴル軍頭目である包金山の部隊、さらにはアルホルチン旗の馬賊テムルジダ等が加わり、総兵力千人余りにして忽ち開魯、綏東（現通遼市庫倫旗、当時小庫倫とも称す）の二県を占領した。その後、これらの部隊には小バインハダ（著名な「胡匪」トクタホの義兄弟）の率いる兵士も加わり、モンゴル軍はさらに林西県や朝陽方面に向けて進軍するようになった。

中華民国北洋政府は阿爾花公らのモンゴル反乱軍を討伐する為に、同年11月17日に姜桂題の率いる毅軍歩兵二千、騎兵一中隊、砲兵一中隊を通州より朝陽方面に向けて出兵させ、また熱河方面より毅軍二千、淮軍一千、禁衛兵二營、張家口より第一師団の約半分、淮軍五百、さらに帰化城に駐屯する混成一旅団を反乱地方に向け出兵させた。

北洋の軍隊による討伐とそれらとの交戦した結果、モンゴル軍は撤退を余儀なくなった。12月1日、ゴンブジャブ等は撤退し、政府軍は開魯県を取り戻す。その後、阿爾花公らは各自の部隊を率いて北方へ逃げ、外モンゴル領内に入り込んだ。ボグド・ハーン政権の陸軍部の統計によれば、当時阿爾花公が率いる部隊の人数は、「合わせて四隊であり、貝子〔阿爾花公のこと〕の家臣を含め合計二百十四名」¹⁷であったという。ボグド・ハーンは阿爾花公の功績を称賛し、彼に貝勒の爵位と陸軍部次官の職位を与えた。

2. ボグド・ハーン政権軍の南進作戦と阿爾花公

1913年1月25日、ボグド・ハーン政権の軍部は「南部境界に中華民国軍が集結したという情報を得た上で、五路の軍を派遣し、地域の防衛と敵の迎撃を計る」¹⁸との文書をボグド・ハーンに上奏し、南部への出兵の許可を請願した。この文書に記されている内容によれば、当時内モンゴルに出兵した軍隊は五路に分かれたことが分った。（表1）

表1 ボグド・ハーン政権軍の内モンゴル出兵の仕組

	指揮官	率いる部隊	進軍方面	備考
第一路	チメッドスレン, ナイダンジャブ	オタイ王及トクタホの所属部隊	エグゼル・ホトクト寺院方面	トクタホの派遣が見送り
第二路	ハイサン, バボージャブ	ハイサン及バボージャブの所属部隊	ダリガンガ方面	バボージャブ部隊を先にダリガンガ方面へ派遣
第三路	ナスンアリビジフ	ナスンアリビジフの所属部隊	スニド左・右旗, ドゥルブド王旗方面	ロシア人軍事顧問二人と通訳一人が同行
第四路	ソノムドルジ, ポンソクタジド	トゥシェード汗及サインノイン汗から集まった三百人とハルハ軍事学校の二百人	フフホト方面	ロシア人軍事顧問四人とボリヤード人通訳三人が同行
第五路	ジュテゲルト	ジュテゲルトの所属部隊	オラド三公, ハタン河(黄河)方面	

この南進作戦請願に対し、ジェブツンダムバ・ホトクトは「この度はトクタホの派遣を見合わせ、彼の兵隊をナイダンジャブに率いさせ派遣せよ。その他は協議の通りにせよ」¹⁹との命令を下した。この命令からトクタホが南進作戦から外されたことは明らかなことであろう。

もっとも注目し得る点は、この南進作戦において派遣された軍隊や指揮官の多くが内モンゴル出身者ということである。その背景について、モンゴル国の学者ジャムスラン氏は「指揮官たちは、主に内モンゴルから帰順し、故郷の解放を目指す人々であった。彼らは〔内モンゴルの〕地理をよくわかるので、軍を率いるのに好都合であった」²⁰と語る。しかし、それと同時に、ハルハ軍を主体とする第四路軍をフフホト方面に出兵し、内モンゴル出身者を主体とする第一、第二路軍を内・外モンゴルの境にあるエグゼル・ホトクト寺院やダリガンガ方面に派遣したことから、「地理をよく知る」という解釈では南進作戦

の仕組みの背景に関する説明は十分ではないかと思われる。

一方、当時イフ・フレーに滞在していたロシア駐モンゴル全権代表コロストブエツは、この軍事作戦の具体的計画について、

蒙古貴族の戦争計画は、個人的動機から露中関係の激化に努め、ロシアを戦争に巻き込もうとさえ思っていた内モンゴルの亡命者によって支持された。この関係で特に頭角を現したのはジュルムの貴族オタイで、…〔中略〕…重い運命の打撃にも拘らず、この二人の兄弟〔オタイとブフ・バヤン〕は好戦的気分を持ち、中国との戦争を支持した。……ハイサンやダムディンスルンもまた中国への軍事行動に賛成した。²¹

と、この南進作戦計画が内モンゴル人の強い意志によって支えられていたことを伝えている。このように、南進作戦における出兵した

軍隊の指揮官の大半が内モンゴル出身者であったことは、自らの故郷を解放しようという内モンゴル人の強い意志を示めすものにほかないであろうと考えられる。

また、軍隊派遣の目的地がシリンゴルとウランチャブの両盟に限られていることに関して、橘誠氏はこの両盟の「盟内の全旗が〔ボグド・ハーン政権に〕帰順を表明していた」ことが「その両盟を中心に軍派遣を決定した」、決定的な要因であると指摘する。²²しかしながら、計画された軍の派遣先はシリンゴル盟全域に及んでおらず、少なくとも第三回日露秘密協商で定められた勢力範囲の確定線（北京の位置する東経 116 度 27 分）より西側であった（地図 1）ことも注目すべきである。

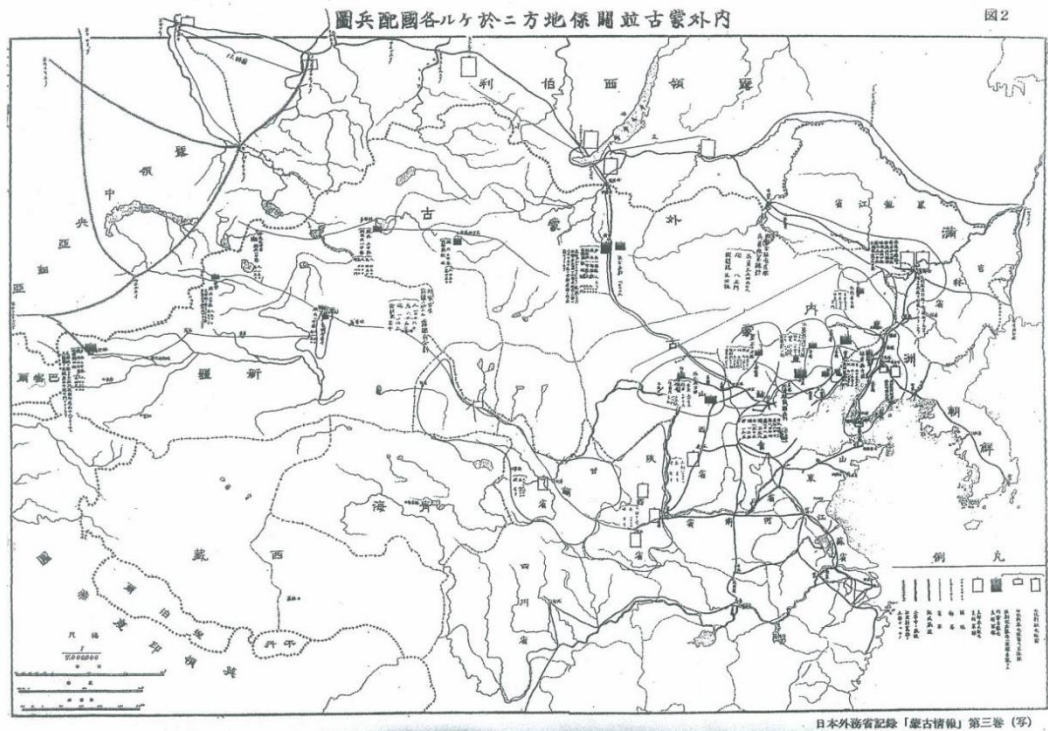
実際、この出兵が決定される直前に、モンゴル側からの援助申し入れに対して、コロストブェツは「もしフフホトより西の領域なら、我々の政府は武器や軍隊派遣の面で援助する可能であろう」²³と回答した。また、これより先に内務大臣ダーラマ・ツレンチメドとの日本訪問をめぐる争議の中でもコロストブェツは、「特に、シリンゴル地方の東部は我々と日本との協定のもと、日本の勢力範囲に移った」と、第三回日露協商による日ロの内モンゴルを分割する計画が水面上に浮かばされた。そこで、1913 年のモンゴル軍の内モンゴルに出兵することは、あくまでも第三回日露協商で定められた「ロシア側の勢力範囲」内でのことを意識した意図的な軍事作戦でもあったと思われる。

一方、中国側はこれより先にモンゴル「討伐」の準備を進めていた。北洋政府は東部内モンゴルを東北三省や熱河省に分割することをもとに、1912 年末頃から既に第一師団を庫倫道路沿いに配置させ、ドロンノール北方二百五十露里に位置するツンツイナには軍需品

の倉庫まで建設させ、また軍需品を軍隊に供給するよう数多くの駱駝を購入するなど、内モンゴルの独立を防ぐため、またモンゴル国との戦闘への準備が着々と進められていた。当時の露国の官報によれば、中国のモンゴル討伐軍は各地で合わせて四万人に達していたという。その配備及び兵数は以下のとおり。熱河地区で約二万二千人、ダリガンガ地区で三千五百人、張家口及びその付近で九千人、帰化城（フフホト）及びその付近で五千五百人であり、これらの軍隊は三月初頭に各地から一斉に前進行動を起こす予定であったと記している。²⁴

これら中国軍の配置情報がイフ・フレーに次々と伝達された結果、ボグド・ハーン政権は 1913 年の出兵を決定することに踏み切ったと考えられる。

一方、1913 年のモンゴル側の南進作戦におけるモンゴル側の出兵人数に関しては、モンゴル側では数字が挙げられてなかったため、その具体的な人数を把握することができなかった。ただ、前節に述べた阿爾花公の所属部隊（二百人余り）、バボージャブの所属部隊（百五十人）の人数、そして、具体人数が記してあった第四路の五百人などから、イフ・フレーより出発する際の派兵総人数は二千人余りであろうと推測される。その後、内モンゴルでは、徴兵が盛んに行われたが、具体的な徴兵者の人数に関する記録は残されなかった。ちなみに、同年 7 月 25 日付けで、当時袁世凱政権の政治顧問であったモリソンが蔡廷干宛てに『モンゴルに関する覚え書き』という文書には、阿爾花公ナスンアリビジフの率いる部隊の人数が「一千五百人」²⁵であったと記されている。その配置は地図 1 に示している。²⁶



3. 阿爾花公部隊の南進作戦について

1913年ボグド・ハーン政権軍の南進作戦において、阿爾花公ナスンアリビジフは第三路軍の指揮官として、同年3月初旬頃より部隊を率いてイフ・フレーを出発し、庫倫から張家口に向かう道に沿って南へ進軍した。阿爾花公は、まず先頭部隊の二百人余りを庫倫から張家口までの道沿いにある滂江²⁷付近まで派遣し、情報収集や乗用馬などの獲得に努めさせた。この先頭部隊の活動状況に関して、同年5月27日付けのモリソンより蔡廷干宛ての書簡には次のような記載がある。

滂江に駐在していた中国兵二百名は、モンゴル軍が来ることを聞き、慌ててその軍事装備などを焼却し、焼却に間に合わなかった物をすべて放棄して、皆逃走したのである。モンゴル人は地形をよく知っていたため、迅速に行動する面で大いに有利であった。彼らは皆良馬に乗っており、しかも、滂江付近に迫

ってきた二百人の紅胡子（馬賊）は、良馬二千匹も持っていた。彼らの行動の迅速さは驚くほどであった。前日に滂江以北七十華里であったが、翌日に滂江以南七十華里に現れ、一晩で百四十華里移動することができた。」²⁸

この記載からモンゴル軍が滂江電報局を如何にも簡単に占領したことが伺える。

この先頭部隊を指揮していたのは内モンゴルゴルロス（郭尔罗斯）旗出身の僧侶ムルンガであった。当時、北洋政府の蒙蔵事務局の顧問として勤めていたスウェーデン人宣教師F・A・ラルソンは彼について以下のように記している。

「ラマも俗人も当時は活発に中国人の駆除に参加した。なかでも活発に働いていたのはラマ僧ムルンガであった。彼は一切の外観を備えることにおいて甚だ宗教的であった。一日の大半をその包の中で経を読み、珠算を爪

繰るって過ごす僧侶であった。しかし、彼もまたその包の中から彼のことを指揮者と看做している部下の進退駆引を指揮していた。彼は周囲に向う見ずの憎悪に燃えた仲間の一隊を集めていたが、彼等は和戦何れにおいても人を殺すことを少しも怖がれない手合いであった。中国人に対する際限のない憎悪が彼らを結合していたのである。」²⁹

ラルソンはまた「ムルンガは、憎悪のあまり英国人グラント氏を殺害したためにその命を失った」と記している。

グラントは中国郵政局が雇った外国人職員である。モンゴル軍が襲ってくるという情報を得た後、彼は数人の中国人同僚とともに滂江より張家口へ逃げる途中で銃を持つ数名のモンゴル人に捕らえられた。そして、彼らはムルンガのいる営中に連れられてきた。ムルンガはイギリス人グラントに対して、「君は張家口行きの旅を続けたまえ。これらの中国人はここに残る。君が去ったのち、我々はこれら中国人を処決する」と告げた。しかし、グラントは事前にこれらの中国人を安全に張家口まで送る約束があったといい、もし、これらの中国人を殺害するのであれば、先に自分を殺せと言い張った。そこで、ムルンガはグラントの言う通り、先ず彼を殺し、そして彼の中国人同僚を全員殺害した。³⁰

この事件後、ラルソンはムルンガのところへ行って、グラントの遺体を運び北京のイギリス大使館へ送った。イギリス当局は直ちにボグド・ハーン政府へ電報を送り、事件の真相解明や犯人逮捕を強く求めた。ジェブツンダムバ・ホトクトは英国からの圧力を無視できず、ムルンガ逮捕令を出した。

庫倫からの命令を受けて、ムルンガ逮捕に駆け付けたのはチャハル軍の指揮官ロブサン・オソル・ジャムチェであった。結局、ムルンガはジャムチェの率いるチャハル軍に逮

捕され、一枚の毛皮の中に縫い込められ、駱駝の上に載せられて、イフ・フレーに送還される途中、ウルガに到着する前に揺られて死んでしまった。

一方、先にダリガンガ方面へ派遣されたハイサン、バボージャブの所属部隊はダリガンガを確保した後、ソノムドルジの指揮下に編入された。その後、これらの部隊がさらにいくつかの小部隊に編成され、シリング盟のウジムチン旗を經由し、ジョーウダ盟ヘシゲテン旗の北部から西南方面へ派遣された。その中で、ゴンブジャブの率いる部隊(八十人)とノログルジャブの率いる部隊(三百人)が、4月3日深夜、ヘシゲテン旗の西にある大王廟に集結していた中国軍を急襲した。この襲撃事件に関して、日本外務省の記録には、

大王廟(多倫諾爾ノ北方二百三十清里ト称ス)ニ於イテ同地駐在ノ歩隊一営(北洋毅軍ノ一部ニシテ蒙兵ノ南下ヲ聞き前進駐屯センメタルモノナリト云フ)砲隊一営(所属不明)ハ去ル四月四日〔三日の誤り、筆者〕夜約五百名ヨリナル蒙兵(一半ハ蒙古馬賊ナリト云フ)ノ襲撃ヲ受ケ不意ノ事トテ何等備フルノ違ナリ砲隊ノ如キハ一発モ発セス逃走シ歩隊モ亦廿余名ノ死傷者ヲ捨テテ多倫諾爾ニ向テ逃走セリ³¹

と、その襲撃の様子を記している。また、4月16日付けの伊集院公使より牧野外務大臣宛ての電報にも、「是等ノ外蒙兵ハ過日克什克騰部ノ大王廟ニ駐劄セル民国兵ノ不意ヲ襲フテ機関砲四門ヲ奪取シ去リ連隊長ハ出没自在ニシテ民国軍ノ隙ニ乗シテ夜襲ヲ試ミ」³²と、今回の襲撃において中国兵の奪われた武器の数まで記している。伊集院はさらに当時の中国の新聞報道を引用し、「該地方ノ警ヲ傳ヘ多倫諾爾駐在ノ鎮守使傅良佐發電トシテ蒙匪南下ノ模様アルニ付各処ニ派兵シテ防禦セシ

メ大王廟地方ニハ沈团长ヲ派遣シタルニ蒙匪ト接戦シ敗北セリ因リテ陸軍部ニ於テ該团长ヲ処罰セラレンコト請フ」と、その後の中国側の対応を報告している。

後に、多倫諾爾駐在の傅良佐は同地駐在の歩兵及び馬隊約三營を大王廟方面に派遣するが、その頃モンゴル兵はすでに該地から立ち去っており、従って戦闘することもなく同地を回復したのである。

このように、モンゴル軍は集団的対置戦を避け、その迅速に移動する長所を生かし、敵の背後から神出鬼没で敵を襲撃し、中国軍に対して常に緊張感を与え、精神的に追い詰めていた。『蒙古地誌』の記録によれば、当時の民国軍指揮官による北京政府への報告書には、「庫倫軍は正々堂々の陣にあらず、常に我らの不意を襲い、我軍が戦闘に入ろうとすれば、〔彼等は〕已に遠くして跡なし、其馬足の快速さを恃みて出没測ることでできず、我軍は実に奔命に疲れる」³³と、モンゴル軍との戦いの難しさを述べている。

モンゴル軍は戦地における迅速な移動と情勢に応じた柔軟な対応を生かし、時には中国の大軍に遭遇し、敗退を喫しながらも、その指定された保護地域には確実に近づいていた。

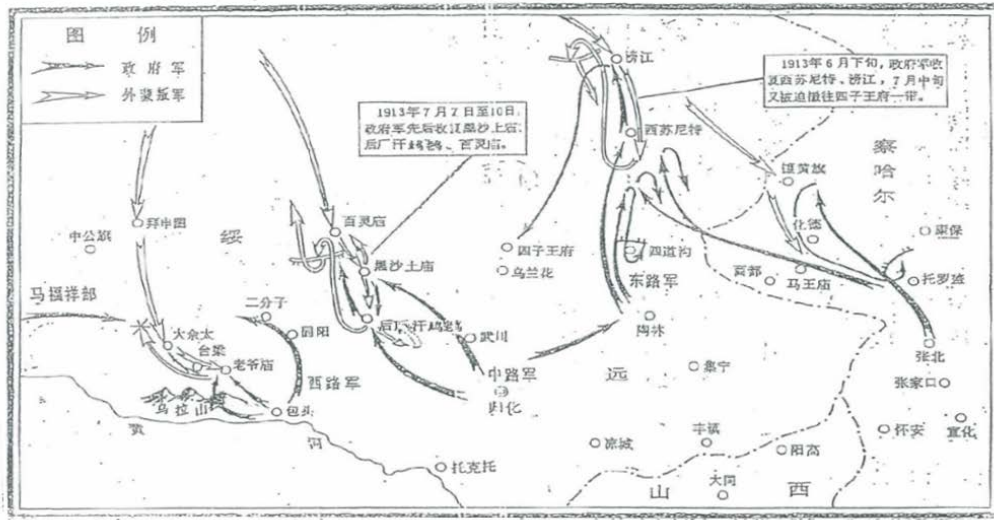
6月に入ると、中国南部に「二次革命」が発生し、袁世凱政権は軍事作戦の重点を南方に当てるようになる。その為、北方に駐屯していたモンゴル討伐軍を後押しとして、軍事的要衝であるフフホトやドロンノールを死守させた。モンゴル軍はこの機会を利用してそのまま前進し、この二箇所付近に接近した。そして、モンゴル軍と北洋の軍はフフホト近辺やドロンノール付近で激戦を極め、両方と

も大量の死傷者を出した。7月5日、伊集院公使は牧野外相宛ての電報で、「内蒙古西二盟、烏蘭察布盟伊克昭盟中前者、即チ四子部部落、毛明安、烏喇特旗等ノ地方、昨今殆外蒙古兵ノ占領スル所トナリ、西方ハ陰山山脈ヲ超エテ薩拉齊、包頭鎮等地方ヲ脅カシ、東方ハ滂江電報局西蘇尼特王府等ヲ襲フテ帰化城、張家口東西ノ沿辺警ヲ傳ヘテ騒擾中ニ在ル」³⁴と、激戦前とも思われるモンゴル軍の占領地区を報告している。

実際、この報告より二日前の7月3日付『政府公報』には、「(張紹曾ノ部下)旅長孟效曾等連日匪ヲ勦シテ勝ヲ獲迭板申図山口、丹伯領諸要隘ヲ破リ西蘇尼特王府及滂江地方等ノ地ヲ肅清シ二百余名ヲ擒斬セリ」³⁵との報道が掲載されていた。しかし、この報道の真否について、モンゴル地方から北京に戻ったばかりのラルソンでさえ、「此種ノ勝戦ノ報ハ殆ド信ヲ置クニ足ラス先ツ日清戦争時代ノ清国側戦報ト同様ノ「スケプチズム」ヲ以テ受取ルヘキ」³⁶と、モリソンに語っている。

しかし、その後、中国軍の勝利は事実であったことが分ったモリソンは、同月25日に蔡廷干宛ての報告書には「現在、滂江には千五百人の中国軍が駐屯している」と、確信を持って記した。(地図2)³⁷

抗击外蒙叛军进攻内蒙中、西部之战示意图
(1913年5月—8月)



以上の記録に基づいて、阿爾花公の率いるモンゴル軍は6月末頃から7月初頭にかけて一時ドロンノール付近まで攻めたが、その後中国軍の反撃に遭い、滂江以北へと撤退したことが判明することは可能である。ボグド・ハーン政権軍の南進作戦もこの7月初期をもって最大の勝利を得、その後、政権内部におけるロシアへの不信が高まることにつれ、次第に自らの戦闘意欲も低下していくことになった。(地図2)

4. 北京政府外国人顧問の努力と阿爾花公の帰還

モンゴル軍南進作戦が始まる当初より、北洋政府はボグド・ハーン政権の上層官僚が計画した戦略に対抗した。その仲介役となったのは前述したスウェーデン人宣教師兼商人F・A・ラルソンである。1893年、ラルソンはニュー・ヨークのキリスト教伝道同盟の委託を受け、モンゴルに伝道しに来た宣教師で、最初の頃、内モンゴルの包頭やフフホト地方に一年余り滞在しモンゴル語を覚えた。その後、オルドス王の紹介でイフ・フレーへ行き、そこで定住し、宣教活動を行った。彼は滞在するうち、ジェブツンドムバ・ホトクトやハ

ンダドルジ親王らと交友を深め、後にジェブツンドムバ・ホトクトより“公爵”の称号を与えられた。当時、「蒙古通」として知られていた彼が1913年1月に北京入りしたのちに、モリソン博士の紹介で北洋政府の蒙蔵事務局の顧問として雇われた。彼と中国政府に若干年勤めるための雇用契約の補充規定には、モンゴルの高級官吏を中国に連れ戻すという任務が彼に課せられる、という内容があったという。

1913年3月14日、ラルソンは北洋政府から課せられた任務を果たす為に北京を出発し、イフ・フレーを目指して再びモンゴルに戻った。そのプロセスについて彼は自伝の中で次のように述べている。

「当時中国の統治者であった袁世凱は、私の所へ使者を寄せ調停するよう要請した。私もこの戦争が両国にとって不幸であると考えていた為、できるだけのことをしようと試みた。私のモンゴル友人たちは私を援助しようとしなかった。私はイフ・フレーへ行って、ボグド・ハーンを動かす、平和を締結させようとしたが、彼から敵対行為を停止させる命令を得ることはできなかった。私は唯一の逃道と

してモンゴル人の本営へ行く決心をした。」³⁸

この記載でいう「モンゴル人の本営」とは実際、阿爾花公ナスンアリビジフが率いる第三路軍の駐屯地であった。

ラルソンが一人で阿爾花公の本営地に駆け付けたのは1913年6月6日であったと推定される。阿爾花公と対面した様子や交渉内容などが詳細に記録している彼の自伝によれば、ラルソンが阿爾花公に「中国の軍隊がモンゴルに於いて与えた損害として五万フランク出させる」ということを説明し、その代わり、

袁世凱の希望として阿爾花公が「二百人を連れて中国に戻る事」を告げた。「ナ侯〔阿爾花公のこと〕は他のモンゴル貴族とこの問題を議論し、彼等を平和の提案に賛成させることを約束した」が、二、三日後、阿爾花公がタブン・オールにあるラルソンの自宅を訪れ、「他の指揮官たちは講和条件に賛成しないが、自分は部下総勢二百名までを領国へ送還し、この親衛兵を率いて北京へ行く用意がある」と知らせたという。³⁹



写真1 ラルソンが6月7日に撮った写真、左から三人目が阿爾花公)⁴⁰

前述した7月25日付モリソンによる蔡廷干宛ての報告書には、阿爾花公に関する一つの重要な情報が同封されていた。「更に重要なことは、庫倫陸軍部次官那貝勒が庫倫に出発し、現在中国に帰還する途中にあることだ。彼の家族や部下が彼と同行している。7月21日、彼は烏得から電報を発信してきて、次の日に滂江を経由して張家口に行くつもりなので、彼を通過させるよう要求した」⁴¹と、この時期の阿爾花公の中国に帰順する動向を報告した。

しかし、阿爾花公が家族及び親衛兵を率い

て張家口にやってきたのは1913年9月19日であって、7月25日付モリソンの蔡廷干宛ての報告書との間に、およそ二カ月の空白があった。では、阿爾花公がどうしてこの時期において北洋政府に帰順する意向を表明し、また何が原因でその帰順は二ヵ月ほど遅れていたのか？

実際、前述した7月25日付モリソンによる蔡廷干宛ての報告書には、ボグド・ハーン政権内務大臣ダ・ラマ・ツレンチメットや活仏の親衛兵長官トクタホ、そしてハイサン公の長男等が中国に帰還する意志があるとの内容

も同封していた。これらの情報は皆イフ・フレからのモンゴル人「伝信人」によって送られてきたものである。その信憑性について、ラルソンは「これらの伝信人は皆私の知人であり、信頼できる」と語った。

内務大臣ダ・ラマ・ツレンチメットをはじめ阿爾花公らの中国に帰順するような動向は、この時期のボグド・ハーン政権内部に現れたロシアに対する不信感につながった。ちなみに、ダ・ラマの北洋政府に申し立てた帰順に関する条件は、「モンゴル人の了承なく漢人はモンゴルの土地において耕作してはならないこと。モンゴル人の爵位を以前のまま保留すること。オタイの王府や破壊されたそれ以外の建築物を再建すること及びその爵位を回復すること。モンゴル人自らが官吏を任命することやその費用を自らが補うこと」⁴²とのことであった。

一方、モンゴル問題をめぐる中露間交渉の進展や「ハルハのみの自治を承認する」との両国の意見の一致が、ボグド・ハーン政権に参加した内モンゴル出身の王公たちに複雑な心境をもたらしていた。さらに、同年5月31日ビント王ゴンチグスレンの突然の死⁴³（親

露派による毒殺の噂あり）がこれ等内モンゴル出身者に更なる不安をもたらしていた。

阿爾花公とビント王は、年齢的にも近い上、両者の領地が隣接していたなどで、以前から仲の良い友人でもあった。このような背景のもとに、山座圓次郎は阿爾花公の内モンゴルに帰還した原因について、「其の同志賓図王カ庫倫ニ在リテ終リヲ善クセス且ツ阿爾花公カ陸軍大臣達頼及陶什陶ト相善カラサルモ又タ其ノ原因タルヘシ」⁴⁴と分析している。山座はまた「必竟庫倫政府カ内ハ漸次ニ露国ノ圧迫ヲ感スルニ至リ外ハ民国トノ戦事意ノ如クナラス庫倫独立ノ基礎動揺シ休戦講和ノ噂サ頻リナル」⁴⁵と、当時ボグド・ハーン政権の直面していた問題を指摘している。

このように、ボグド・ハーン政権内部におけるロシアへの不信、並びに、親露傾向のある政権そのものに対する内モンゴル出身者の不満が高まりつつあった中、1913年8月1日、ボグド・ハーンより再び「帰順を表明した内モンゴルを保護するため五路の大軍を派遣せよ」（表2）との命令が下される。⁴⁶

表2 1913年8月1日の進軍命令による派兵状況

	指揮官	出発地	目的方面	備考
第一路	ダムディンスレン, ナイダンジャブ	ウジムチン, ホーチド	シラ・ムルン東岸	ジョーオド, ジュルム, ジョソト三盟のモンゴル人を保護する目的
第二路	ソミヤ, バボージャブ	アバガ, アバガナル, ヘシゲテン	シラ・ムルン西岸	
第三路	ナスンアリビジフ, ムルンガ	スニド	チャハル旗, 張家口道沿い	
第四路	チャグドルジャブ		ウラーチャブ, イフジ	
第五路	ガルソンチャムバドグチニヤム		ヨー両盟, アラシャン, フフホト方面	

このボグド・ハーン政権による二回目の作戦命令は、中国南部で「二次革命」が勃発した時期では、内モンゴル統合の絶好のチャンスであると看做した行動であり、ボグド・ハーン政権内部における内モンゴル人（特に東部三盟出身者）の不満を解消するための狙いでもあったと考えられる。

阿爾花公の張家口入りが二か月ほど延期された背景には、こうしたボグド・ハーン政権による戦略転換が大いに関係していると推察される。しかし、こうした内モンゴル東部三盟にも進軍する命令は、結局のところ、武器弾薬の欠如や中国軍隊の嚴重な防備などが原因でその目的に達することはできなかった。

そこで、1913年9月19日、阿爾花公は家族及び親衛兵二百人余りを率いて、ラルソンの案内のもとに張家口に入り、張家口駐在中國軍に帰順した。その様子についてモリソン次のように記している。

「総統の下された命令により、彼の〔張家口〕安全通過が保障された。彼は中国の防衛線に到達する時に盛大な歓迎を受けた。彼はこの歓迎振りが非常に印象深かったため、自分の数多くの部下を全部中国に引き戻すことを考えたという。これ等の人は現在チャハル域外にいて、自分の王がどのような待遇を受けるかを見守っている。」⁴⁷

(写真 2. 阿爾花公が兵隊を率いて北京入りしている様子)

しかし、その後の事態発展はモリソンの言うほど楽観的ではなかった。チャハル境外に滞在していた一部のモンゴル兵士は、ラルソンが彼等の指揮官を連れ去ったことに腹を立て、報復としてラルソンのタブン・オールにあった馬四百匹を牧者と共に外モンゴルへ連れ込んだ。また、阿爾花公について中国に帰順したモンゴル兵は少なく、チャハル域外に

いた阿爾花公部隊のモンゴル兵の多くはバボージャブが率いる部隊に合流した。

II. おわりに

袁世凱は阿爾花公が部隊を率いて帰還したことを大いに賞賛し、入城する際には旗を揚げて歓迎するよう命令した。また、彼に郡王の爵位を授与し、阿爾花公とその叔父ポインアリビジフの北京駐在も許可し、奨励として彼等に大量の賞金を与え、さらには阿爾花公本人の要望に応じて、彼と共に帰還した「バトビリゲ等七十四名の兵士に一級昇進」を許可し、残りの兵士たちにも三ヶ月間の給料を支払った。⁴⁸

モリソンは、これらの帰還したモンゴル兵士を阿爾花公の指揮下に一つの精鋭部隊として編成し、河南省に起こった「白狼」事件を鎮圧に務めさせるように提案したが、袁世凱はそれを承認しなかった。

1913年12月20日付の袁世凱宛の蒙蔵事務局の呈文には「署東蘇尼特扎薩克郡王那遜阿爾畢吉呼請示謁見日期」⁴⁹と書いてある。この表現から、この頃より、阿爾花公は東蘇尼特旗のザサク郡王になっていたことが伺える。そして、1915年2月20日、袁世凱は阿爾花公に中華民国陸軍中將の肩書を付けた。⁵⁰

このような袁世凱による阿爾花公への優遇措置に対して、東北三省に分割された東部内モンゴル人からは不満の声が挙げられた。当時ハラチン旗選出した中華民国参議院議員であった金永昌は日本の小村通訳官に次のようなことを語った。

阿爾花公ハ内蒙ノ出身ニシテ民国ニ背反シ外蒙ノ独立ニ加担シ一時開魯事変ノ際ノ如キ東札魯特王妃及ヒ阿魯科爾沁貝勒ヲ虜ニシ去リタルハ即チ阿爾花公及官保札布ノ所業ニシテ該貝勒ハ其後幸ニ放歸セラレタルモ監禁ノ

際ニ病ヲ得タル為竟ニ一命ヲ失フニ至リタルニ民国政府ハ該貝勒ノ死節ニ対シ該僚王公ノ希望ヲモ顧ミス何等ノ卹典ヲ与ヘスシテ今日ニ至リ却テ右叛徒ノ首領阿爾花公ノ帰順ニ際シテハ陸軍部及参謀部ヨリ人ヲ派シ資ヲ備ヘテ優待至ラサルナキハ順逆邪正ヲ無視スルノ甚シキモノニシテ折角外蒙ニ附和セス民国ニ離反セサル東部蒙古人王公人民ノ心ヲ服スル所以ニアラス⁵¹

この語りは、当時共和制中華民国政府に賛同し、外モンゴルの独立運動に参加しなかった東部内モンゴル人による、北洋政府の阿爾

花公に対する優待策に対して甚だ不平の意を示さしたものである。

一方、上述した阿爾花公ナスンアリビジフの中国「帰還」は、ボグド・ハーン政権軍の南進作戦における一つの異例な事件でもあったが、兵力が極めて不足な作戦全体に与えた影響は極めて大きかった。その後、戦闘員や武器の欠乏、またはロシアからの圧力などがあって、ついに 1913 年 12 月 16 日モンゴルの総理大臣サイン・ノイン・ハン・ナムナンスルンはロシア外相サゾノフに内モンゴルから撤兵する旨を報告した。⁵²



写真2 阿爾花公・ナスンアリビジフが所属部隊を率いて北京入りしている様子⁵³

ちなみに、中華民国八年に作られた蒙藏院封叙科編『蒙回藏王公札薩克銜名表』の哲里木盟科爾沁左翼後旗欄には「貝子、巴圖阿勒坦鄂齋爾、七年襲、父那遜阿爾畢吉呼前光緒二十六年輔国公」と書いてあることから、ナスンアリビジフは民国七年、すなわち 1918 年に亡くなられたと推定される。⁵⁴

阿爾花公・ナスンアリビジフを事例とした、20 世紀初期の内外モンゴル民族の合流によ

る民族独立を目指すプロセスは、単に中国とモンゴル両国間の問題ではないこと、とりわけ中国とロシアや旧ソ連に挟んだモンゴル社会全体の歴史が示している。本稿に提示したのはほんの一つの例にすぎないが、どちらに帰順していくか、という民族と国家間の関係構築は単に民族的アイデンティティだけでは説明することができない、ということは本稿の試みに証明されるといえよう。

脚注 *

- ¹ 小軍 (1971-) , (中国・内モンゴル) 锡林郭勒职业学院图书馆.
- ² *Л. Жамсран, Монголын төрийн тусгаар тогтнолын сэргэлт, Улаанбаатар. 1996, 61—62 頁.*
- ³ 中見立夫著:「モンゴルの独立と国際問題」、『アジアから考える[3]周辺からの歴史』、東京大学出版会、1994年、99頁.
- ⁴ 橘誠著:「ボグド=ハーン政権の内モンゴル統合の試み—シリーンゴル盟を事例として—」、『東洋学報』第87巻第3号、2005年12月、83頁.
- ⁵ 名前の漢字表記は阿爾花公・那遜阿爾畢吉呼であるが、資料や文献によって「那公」、「那貝勒」、「ナ侯」及び「プリンス・ナ」と表記することがある.
- ⁶ 現在の内蒙古自治区通遼市科左後旗吉爾嘎朗鎮阿爾花嘎查.
- ⁷ 日本外務省記録 1/6/1/4/2/4 各国内政関係雜纂/支那ノ部/蒙古 (以下は外務=蒙古と略) 第三卷、大正二年九月二十九日付在支那特命全權公使山座圓次郎より外務大臣男爵牧野伸顯殿機密第349号、「阿爾花公事略」(MT16144 1678) .
- ⁸ *Монгол Улсын Үндэсний Төв Архив* (以下はМУУТАと略) . ФАЗ—Д1—ХН347. (Фはフォント番号、Дは目録番号、ХН 案件番号を示す).
- ⁹ 中見立夫「ハイサンとオタイ—ボグド・ハーン政権下における南モンゴル人」、『東洋学報』57巻1・2号、1976年、参照.
- ¹⁰ 外務=蒙古、第一巻.
- ¹¹ *Монголын ард түмний 1911 оны үндэсний эрх чөлөө тусгаар тогтнолын төлөө тэмцэл: Баримт бичгийн эмхэтгэл (1900—1914)* , *Улаанбаатар, 1982* ; (以下 *Баримт бичгийн эмхэтгэл (1900—1914)* , *Улаанбаатар, 1982* と略) 第78号資料、143—144頁.
- ¹² 外務=蒙古、第三巻、「阿爾花公事略」(MT1614 4 1678-1679) .
- ¹³ 外務=蒙古、第一巻、「在四平街守田大佐報告/阿親王ノ向背」(MT1614 4 403-404)
- ¹⁴ 外務=蒙古、第二巻、「大正元年十二月七日付在奉天総領事落合謙太郎より外務大臣子爵内田康哉殿」(「博王府泰吉富升阿ノ談話」) 附属書.
- ¹⁵ 外務=蒙古、第二巻、「大正元年十一月二十九日付在奉天総領事落合謙太郎より外務大臣子爵内田康哉殿」(「在昌図王尚忠ノ談話」) 附属書.
- ¹⁶ 外務=蒙古、第三巻、「阿爾花公事略」(MT1614 4 1679) .
- ¹⁷ МУУТА. ФАЗ—Д1—ХН8.
- ¹⁸ *Баримт бичгийн эмхэтгэл (1900—1914)* , *Улаанбаатар, 1982* ; 第117号資料、223—226頁.
- ¹⁹ *Баримт бичгийн эмхэтгэл (1900—1914)* , *Улаанбаатар, 1982* ; 第117号資料、225頁.
- ²⁰ *Л. Жамсран, 1996, 61 頁.*
- ²¹ Korostovetz 著、高山洋吉訳『蒙古近世史』(森北書店 昭和十六年)、363—364頁.
- ²² 橘誠、83頁.
- ²³ МУУТА. ФАЗ—Д1—ХН347.
- ²⁴ 日本外務省記録 1/6/1/62-63、清国革命動乱後ノ状況ニ関スル各省及府県庁報告雜纂、海軍省及軍令部ノ部 第二巻、「清国革命動乱特報附録第三七号」(大正二年二月十八日) . 尚、『蒙古民族通史』(内蒙古大学出版社、2002年) 第五巻(上) 253頁によれば、当時内モンゴル地区に集結していた中国軍隊は最終的に七、八万人に達していたという.
- ²⁵ [澳] 骆惠敏编『清末民初政情内幕—〈泰晤士报〉驻北京记者袁世凯政治顾问乔·厄·莫理循书信集』下巻(以下モリソン书信集と略) 第631号文附件、214頁。(上海、知識出版社、1986年.)
- ²⁶ 日本外務省記録『蒙古情報』第三巻(1-6-1-

57_003)、大正二年二月。

27 地名。当時そこには中国の電報局が設置されていた。張家口から庫倫までの電報線総長は約 950km であり、其の間には三つの電報局が置かれていた。庫倫から南 240km の処は叨林電報局、そこから南約 240km の処は烏得電報局、そこから更に南 240km の処にあったのは滂江電報局。1913 年 5 月の時点で、この三つの電報局が皆モンゴル人の支配下にあったとみられる。

28 モリソン書信集、第 601 号文、160 頁。

29 F.A.ラルソン著、高山洋吉訳『蒙古風俗誌』（改造社発行 昭和十四年）74-75 頁。

30 Frans August Larson, Larson Duke of Mongolia, Boston, Little, Brown, And Company, 1930, pp.226-227.

31 外務＝蒙古、1/6/1/436。「大王廟地方丹擾乱ノ真相」大正二年四月三十日。

32 外務＝蒙古、「内蒙古地方ニ庫倫兵来襲ニ関スル報告ノ件」大正二年四月十六日。

33 柏原孝久、浜田純一編『蒙古地誌』上巻、1554 頁。（東京富山房 1919 年）

34 外務＝蒙古、「内蒙古鄂爾多斯地方ニ関スル情報ノ件」大正二年七月五日。

35 外務＝蒙古、「蒙古討伐軍戦勝行賞ニ関スル大総統令訳文送付ノ件」大正二年七月三日。

36 同上。

37 軍事科学院主編『中国近代戦争史』第二冊、軍事科学出版社、1984 年、第 308 頁。

38 F.A.ラルソン著『蒙古風俗録』、76 頁。

39 F.A.ラルソン著『蒙古風俗録』、77-78 頁。

40 沈嘉蔚編『莫理循眼里的近代中国：目击变革』、福建教育出版社、2005 年、第 76 頁。

41 モリソン書信集、第 631 号文、214 頁。

42 モリソン書信集、第 631 号文、213 頁。

43 『鄂多台日记』、近代中国史料丛刊三辑第五十八辑、文海出版社有限公司、1990 年。第 200 頁。

44 外務＝蒙古、第三巻、「阿爾花公事略」

(MT1614 4 1680)。

45 外務＝蒙古、第三巻、「東蒙阿爾花公帰順ニ関スル件」(MT1614 4 1676-1677)。

46 *МОНГОЛЫН ТҮҮХИЙН ЭХ СУРВАЛЖ (1911-1921), Улаанбаатар, 2010.* 第 212-213 頁。

47 モリソン書信集、第 646 号文、229 頁。

48 『政府公報』1913 年 12 月 26 日。

49 『政府公報』1913 年 12 月 26 日。

50 百度文庫：『中华民国北京政府授予将军全名录』、1915 年 2 月 20 日；
<https://wenku.baidu.com/view/b088f2d2240c844769eaeaea.html>

51 外務＝蒙古、第三巻、「東蒙阿爾花公帰順ニ関スル件」(MT1614 4 1675-1676)。

52 陳春華訳『俄国外交文書選訳——關於蒙古問題』、黒龍江省教育出版社、1991 年、217 頁。

53 沈嘉蔚編『莫理循眼里的近代中国：目击变革』、福建教育出版社、2005 年、79 頁。

54 馬大正主編『民国边政史料匯編』第十四冊、北京：国家図書館出版社、2009 年、315 頁。

*参考文献

[1] 中見立夫著：「モンゴルの独立と国際問題」、『アジアから考える[3]周辺からの歴史』、東京大学出版会、1994 年。

[2] 橘誠著：「ボグド＝ハーン政権の内モンゴル統合の試み—シリーンゴル盟を事例として—」、『東洋学報』第 87 巻第 3 号、2005 年 12 月。

[3] 中見立夫：「ハイサンとオタイ—ボグド・ハーン政権下における南モンゴル人」、『東洋学報』57 巻 1・2 号、1976 年。

[4] Korostovetz 著、高山洋吉訳『蒙古近世史』、森北書店、昭和十六年。

[5] 〔澳〕 骆惠敏編『清末民初政情内幕—(泰晤士报) 驻北京记者袁世凯政治顾问乔·厄·莫理循书信集』下巻、知識出版社、1986 年。

[6] F.A.ラルソン著、高山洋吉訳『蒙古風俗誌』、

- 改造社發行、昭和十四年。
- [7] Frans August Larson, *Larson Duke of Mongolia*, Boston, Little, Brown, And Company, 1930.
- [8] 軍事科学院主編『中国近代戰爭史』第二冊、軍事科学出版社、1984年。
- [9] 沈嘉蔚編『莫理循眼里的近代中国：目击变革』、福建教育出版社、2005年。
- [10] 『鄂多台日记』，近代中国史料丛刊三辑第五十八辑，文海出版社有限公司，1990年。
- [11] 陳春華訳『俄国外交文書選訳——關於蒙古問題』、黒龍江省教育出版社、1991年。